

目立つ若年男性の加害

母親が不在の間、留守番する若い男が、慣れない育児にいら立ち暴力をふるう――。最近の虐待事件が目立つパターンだ。

3月中旬～下旬に大阪府門真市で、同居女性の長男(2)を殴って死なせた疑いがあるとされる元少年(20)は逮捕後、「育児と家事を全部させられていた」「イライラの矛先を子どもに向けてしまった」と大阪府警に供述している。捜査関係者によると、元少年は職を転々とし、事件当時は無職。女性が働く間は男児に食事を食べさせたり、おむつを換えたりしていた。

警察庁によると、虐待事件の検挙件数は2000年の186件から09年は335件へと増えた。実父または母親と内縁関係にある男らが加害者になるケースが目立ち、全体数を押し上げている。津崎哲郎・花園大学教授(児童福祉

母親が働く間育児 ■ 孤立しイライラ

論)は「経済的困窮や親の未熟さ、近所づきあいの減少などによる家族の孤立化で虐待が発生しやすい要因が社会的に広がっている。力の強い男による虐待は重大な結果に陥りやすい」と指摘する。不況が続き共働きや失業が増える中で、母親が働く間、男性が子育てや家事を担う例が多くなっている。

大阪府富田林市の子育て支援NPO法人「ふらっとスペース金剛」にも、子を連れてやってくる男性が増えた。「1人で子育てしている、大人と話したのは1週間ぶり」と話す父親も。こうしたことから約3年前、男性対象の料理教室や体操教室を始めた。岡本聡子代表理事は「子育てに熱心な男性も多い。情報交換や悩みを打ち明ける相手が見つけられるよう、地域環境作りが必要だ」と話した。